修論要旨

墓地から見る現代同族結合継続の条件
～埼玉県比企郡小川町竹沢地区上勝呂における同族～

松本　有加

第一章　先行研究と問題の所在

同族についての研究はこれまで多くの研究者によって行なわれ、その研究蓄積は膨大な数にのぼる。喜多野清一は系譜関係説を唱え、また有賀喜左衛門の主従関係にもとづく経営体説を説いた。しかし両者の説は現代の同族において適応しない部分も多いのである。また従来、同族は村落の社会集団として位置づけられてきた。同族は単独では家を存続させてゆけない当時における、他の集団よりも手厚い保護が受けられる一種の保険的役割も担っていたのである。しかし各家が独立して同族という保険がなくても家を存続してゆくことが可能な現代において、そのような同族の機能は失われてしまったにもかかわらず、同族は存在している。機能的にも構造的にも変化し、その数は減少傾向にあるが今なお同族は存在し続けているのである。本稿はそのような現代の同族を結合せしめている要因を探るものである。

これまで先祖祭祀および同族祭祀という観点から同族結合へアプローチを試みたものは数多く存在するが、墓地から同族結合を説くものはあまり見られなかったのが現状である。また埼玉県には同族が数多く存在しているにもかかわらず、これまで全くと言っていいほど、研究が進められてこなかったのである。そこで本稿では埼玉県の比企郡竹沢地区小川町上勝呂に存在している同族を取り上げたいと思う。当地に存在する同族は同族で占有の墓地を持つという特徴を持っている。それ自体は全国的に見ても特有のものではないが、近接する祠堂と同族祭祀を付与することにより、この土地での現代の同族のあり方が見えてくる。また従来は村落の中の単位として研究されがちであった同族を「家」の集合体としてだけではなく、更にその先にある「個人」にまで目を向けたいと思っている。つまり現段階で同族に属する人々にまで目を向ける必要性があるということである。なぜなら同族崩壊が進む中、まぎれもなく現代の同族を成立させ、そして結合せしめているのは、今ある人々であるからである。

このように本稿は従来行なわれてきた同族研究の中でも、本稿では少々違った視点および手法からアプローチを試みたいと思っている。

第二章　調査地概観

第二章では調査地における概要と上勝呂に存在する三つの同族の詳細を述べることとする。

小川町は埼玉県のほぼ中央部を占める比企郡の北西部に当たり、東を嵐山町、南をときがわ町、西は東秩父村、北は寄居町と接し、首都から約 60 ㎞圏に位置するため、古くは交通の要所として栄えていた。面積は 60.4 平方㎞で、地形的には外秩父山系の東の縁にあたる。その約 33％は山林面積である。特産物として小川和紙、小川素麺がある。小川町は和紙の産地と

して「和紙の里」「紙漉きの里」と呼ばれている。中世には鎌倉と上州・信州を結ぶ鎌倉街道上道が町の北東部を通っていた。大正 12 年に東武東上線小川町駅、昭和 9 年に国鉄八高線小川町駅が営業を開始して、集散地としての役割を高めている。道路は関越自動車道が北東端をかすめており、平成 16 年 3 月に関越自動車道の嵐山小川インターチェンジが開通し、交通利便性の向上が見られる。平成 18 年現在、人口は 36,231 人であり、近年ではみどりが丘地区や東小川地区などのニュータウン化が進み、首都圏のベッドタウンとして開発が行なわれている。

勝呂は竹沢地区のほぼ中央に位置し、西部の上勝呂と東部の下勝呂に分かれる。上勝呂の世帯数は平成 17 年 10 月の時点で 91 戸、人口は 298 人となっている。上勝呂の鎮守として白鳥神社がある。寺院は小字西山に天台宗西光寺があったが、明治の廃仏毀釈の際に住職が還俗したために廃寺となった。

上勝呂は更に上組と下組に分かれる。上組はその字名をとって西山組とも呼ばれている。上勝呂は 11 の班で構成され、1 ～ 6、11 班が下組に居住し、7 ～ 10 班が上組（西山組）に居住している。なお 11 班は新しく来住した住民である。

上勝呂にはOイッケ、Tイッケ、Yイッケの三つの同族が存在している。Oイッケは7戸で構成され、その全てが旧玉川村にある曹洞宗円通寺の檀家である。Oイッケはイッケのみで墓地を形成し、その隣には観音堂という持仏堂を所有している。またOイッケの稲荷社も存在する。Tイッケは8戸で構成され、全戸が寄居町富田にある真言宗不動寺の檀家である。Tイッケは墓地が二ヶ所ある。またTイッケはその二ヶ所ある墓地のうちの片方の墓地にTイッケの稲荷社が隣接している。Yイッケは6戸で構成され、皆寄居町富田にある真言宗不動寺の檀家である。Yイッケは墓地が三ヶ所ある。本家のある墓地にYイッケの神明社が隣接している。

第三章　墓地・祠堂・同族祭祀

第三章では上勝呂に存在する祠堂を紹介した上で、そこで同族祭祀が定期的に慣行されていることの機能的側面を考察する。そしてその同族祭祀が行なわれている祠堂と同族占有墓地の近接性に注目し、その空間における現代の同族への影響を考えてゆきたい。

上勝呂には薬師堂、観音堂、阿弥陀堂、三つの稲荷社と神明社がある。同族祭祀としてOイッケがOイッケの稲荷社で稲荷の祭祀行ない、観音堂にて釈迦（潅仏会）、観音の祭祀を行なう。TイッケはTイッケの稲荷社で稲荷の祭祀を行ない、YイッケはYイッケの神明社で神明の祭祀を行なう。同族祭祀はその同族構成員のみしか参加を許されない、同族のための祭祀である。構成員はこの同族祭祀に参加することによって「自分は○○イッケの一員なのだ」と自身の所属している同族の一員としての自覚を再認識させることができるのである。その機会が毎年定期的に存在し、同時に意識の更新も行なわれる。よって同族祭祀が行なわれ続ける限り、構成員の世代交代があったとしても同族の一員としての意識は保たれるわけである。同族祭祀が毎年行なわれることと同族祭祀に参加することは構成員の意識の再編成を行なわせ、帰属意識を維持せしめる重要な機能を持っているのである。

その同族祭祀の行なわれているOイッケの観音堂、Tイッケの稲荷社、Yイッケの神明社はいずれも各イッケの墓地と隣接している。各祠堂で祀られているのが同族神という

わけであるが、この同族神というのは一概に先祖神と言えることができない。なぜなら同族神といってもその種類は多様であり、もちろん先祖の場合もあるがそうでない場合も多いからである。よって同族祭祀＝先祖祭祀と簡単にイコールで結べないものも数多く存在するのである。

しかしここで重要なのは同族神が何なのかということではない。注目すべき点は上勝呂ではその同族祭祀を行なっている祠堂と同族占有墓地がセットで存在しているところである。筆者はこの墓地こそが今度は現代の同族構成員同士ではなく、現代の同族と過去の同族とをつなぐ仲介的な役割を果たしていると考える。この同族占有墓地を同族祭祀と先祖との中間に置くことで初めて同族祭祀が先祖祭祀へとつながるのである。祠堂で同族祭祀を定期的に行なうことにより今の同族の結合が保たれる。更にその同族祭祀が定期的に行なわれる祠堂の隣には自らの所属する同族のみの墓地が存在し、同時に自らの所属する同族の先祖をも感じ取ることができるのである。ここにおける同族祭祀の機会というのはその会場となる祠堂と墓地がセットになっていることによって今ある横のつながりだけではなく、歴代的につながってきた縦のつながりをも実感させるものとなっている。この同族祭祀の行なわれる祠堂と同族の先祖のいる同族占有墓地とがセットになったこの場所こそが、上勝呂における現代の同族結合を支えている土台となっているといえるのではないかと考える。

第四章　個人の視点から見る同族

精神的なつながりのみになった現代の同族における結合の要因を探るためにも、やはり今同族に所属している人々の視点に立って考えなければならない。そこで本稿では個人の言説より現代の同族を探ってゆこうと思う。まず彼らの墓地に対する言説から考察する。次にOイッケのみに注目し、本家と分家のあり方を双方から解き明かしてゆく。最後に上勝呂に存在する三つの同族の関係性を述べてゆきたい。

同族に属する個人の墓地に対する言説から、同族占有墓地は今生きているイッケの人々と、イッケの一員として生きていた先祖との日常的な接点であることが見えてきた。今生きているイッケの人々は日常の生活の中で墓地を通してイッケの先祖を感じる。そして過去にイッケの一員として生きていた人々は死してもなお、イッケの一員として墓地を通してイッケの子孫を見守ってゆく。ゆえに今生きている人もいずれ子孫を見守る立場になりたいと思う。このような感情を連鎖させていく場として同族占有の墓地は機能しているのである。

Oイッケ内の本家と分家の言説からは、双方の関係が浮かび上がってきた。本家はOイッケが代々存続してゆくためにOイッケの祭祀の慣行を重要視し、それに分家の人たちが参加しやすいように変化させてきた。それに対し分家の人たちはOイッケの一員としての立場を保つためには他の家々との関係を築くことが必要と考え、代々分家の使命として祭祀に参加してきた。つまり本家当主は「いかにOイッケを存続させてゆくか」ということを考えているのに対し、分家は「いかにOイッケの一員であり続けるか」ということを考えているということである。その両者の思いの中心にあるのが「Oイッケの祭祀」であり、特にOイッケ構成員に限定されて行なわれる同族祭祀であり、そして同族祭祀が行なわれる場としての墓地、そして祠堂なのであ

る。これらを介することによって本家はOイッケを存続させることができ、分家はOイッケの一員としてあり続けることができるのである。

同族に属する人々の言説から同族間の関係を捉えようと試みた。そこには同族間における隠れた対抗意識も見られ、またそのように互いに意識しあっているからこそ、自身のイッケをもしっかり保ってゆこうという思いも起こってくるのだと思う。そして互いの同族を意識しつつ、他の同族の存在は自らの同族をも存続させる要因の一部ともなっているのである。

第五章　同族占有墓地をめぐる「出来事」の考察

一つの同族をとっても、時代ごとにそして世代ごとに様々な「出来事」があった。この章ではそんな同族内で起こった墓地に関する「出来事」から同族結合を考えてゆきたいと思う。ここではOイッケ内の分家がイッケ脱退を本家に申請してきた「出来事」、Oイッケ墓地の石垣を工事するという「出来事」、 TイッケとYイッケにおける墓地所有権をめぐる「出来事」の3つの「出来事」から考察してゆきたい。

Oイッケ内の分家がイッケ脱退申請をしてきた「出来事」では、彼らにとってOイッケの占有墓地に自らの墓があるということが、イッケに属するための必要不可欠な条件なのであることを教えてくれた。またOイッケの石垣工事の「出来事」では工事がイッケで協議し、イッケで工事を見守り、イッケで費用を分担するという形で進められ、Oイッケの結合の強さと本家の統率力が伺えた。最後のTイッケとYイッケの墓地所有をめぐる「出来事」では墓地という場が慎重に取り扱わなければならない重要な場であるということ、そして墓地を介して両者の関係まで垣間見えるものであった。

結語

このように当調査地において現代の同族を結合せしめる要因として墓地の存在が明らかとなった。また墓地はセットとなっている祠堂で同族祭祀を行なうことにより、現在だけではなく過去から現在そして未来へと同族を継続させてゆく機能をも持ち合わせているものであった。そしてそのような事実に個人の言説と「出来事」からのアプローチを加えることにより、よりいっそう墓地の重要性が明確に見えてきたのである。